

昨年10月からNPOおおさか緑と樹木の診断協会との事務スペースの一部シェアを始めました。大阪府庁の近くにある当センター事務所は、人が常駐しない日もあり、事務所スペースの使い方では若干ゆとりがあります。そこで、有効活用することになりました。

昨年の秋、当センターの常務理事O氏が理事長である同じく特定非営利活動法人である「おおさか緑と樹木の診断協会」が事務所移転を検討していたのを、事務所機能をふくめて受け入れ同居することとなりました。

その結果、会議スペースの利用も増え、また、室料を一部分担して頂くことにより、当センターの会計上の支出が大きく改善されることとなりました。

100名以上の樹木医で構成する「おおさか緑と樹木の診断協会」との組み合わせは、人材及び情報の点でお互いにプラスとなり、今後は共同で事業を行うなど、お互いの活動の活性化が期待できると思います。

これにより当事務所としては、毎週木曜日の午後(14時以降)は事務所に誰か居ます。第2木曜日の二木サロンも含めて、気軽にお立ち寄りください。

通常総会

平成29年6月9日午後2時30分から、ドーンセンター(大阪府男女共同参画・青少年センター)において平成29年度通常総会を開催した。正会員66名の内過半数の39名の出席となり、本総会は成立し、吉田理事長を議長として、提案された平成28年度事業報告および決算報告書、平成29年度事業計画案及び収支・支出予算案ならびに総会議決事項の委任は原案どおり可決された。総会終了後、中田政廣理事による「みどり豊かな街の景観をはぐくむために…」について講演があり樹木医でもある氏の造園分野での取り組み樹木への接し方の重要性を語られた。

編集後記

常々亡くなられた方の蔵書やメモのアーカイブの必要を話題にしていたのですが、元理事長の清水正之氏の資料を当センターに、また一部大阪府で預かってもらうとなりました。あの酒仙の名に相応しい一面しか知らない我々にとって、いつこれだけの図書の読破がなされたのか、ビックリボン！書齋に座り込みの日でした。ご報告！この四月から大阪府時代の同僚の大槻憲章氏が事務を手伝ってくれています。元公園課長だけあって当NPO存続の健全化など事業の手法や運営についている提言もあり、頼もしい限りです。申し訳ないことにボランティアでお願いしていますが、東京オリンピック、パラリンピックも2年後。大阪万博2025にむけて造園からの街づくり提案など、早きに失することはありません。ほちほちですわってどうです？ (事務局)

◎ ご入会の案内

当センターは都市緑化への協力を努めながら、造園、園芸技術の研究、研修会の開催、自然と環境問題の調査、国際交流の推進などをテーマに活動しています。関心をお持ちの方、主旨にご賛同の方はぜひご参加下さい。

	入会金	年会費
個人正会員	10,000円	10,000円
団体正会員	50,000円	30,000円
賛助会員	30,000円	20,000円
友の会	免除	3,000円

◎ ご寄付のお願い

当センターの活動をさらに活性化させるため、広く皆さまのご支援を賜りたく、ご寄付をお願い申し上げます。尚サロンでは持ち寄りで運営しておりますので、更にご協力をお願いします。

◎ ご寄付

30,000円 (中橋文夫、福原成雄(敬称略))

◎ 新入会員のご紹介 (平成30年4月末現在)

個人正会員 信原宏平
 団体正会員 (株)高橋造園土木(個人会員から)、東邦レオ(株)

NPO法人 国際造園研究センター

〒540-0021 大阪市中央区大手通1-4-2 ワイズ谷町ビル202号 TEL:06-6944-2040 FAX:06-6948-5282

ホームページ <http://www.klrs.org/> ※メールアドレスが変わります。詳しくはホームページまで。 国際造園 で検索!

国際緑化協力の現場から

ポット苗の容器除去をめぐるって

私は中国黄土高原の緑化活動に参加している。国際協力緑化といえば何やら華やかな感じだが、現場の実態は泥と汗と混乱にあふれている。かつて松苗は裸根苗を用いていた。2000年頃からポリ袋あるいは黒ポリ鉢で養成されたポット苗が使われるようになり、苗運搬時の根の乾燥防止や植苗適期が広がるなど大きな効果があった。しかし新しい問題も生じた。ポットのまま埋めるのである。2005年頃から中国の乾燥地の村々で植苗作業において、村の担当者がポットを取り除かずそのまま埋めるように主張し始めたのである。その根拠を聞いてみると、上位組織から指導があったというのである(その現物書類の存在は確認できていない)。

ポット苗の容器は取り去って植えるべきと思うけれども根拠無しでは相手を説得することはできない。そこで、実際にあえてポットのまま植えて実験した。①ポリ袋そのまま袋の上端も重ねて閉じる、②袋の底は切り開き上端は閉じる、③袋の底を切り開き上端も開ける、④根土を残し袋は全て取り除く、⑤袋を取り除き土も落として裸根にする、それぞれ13本を現地圃場に植えた。



3年間の実験で枯れたのは、④で動物に喰われた1本、⑤で立ち枯れ1本+動物1本+人間による損傷1本であった。①の袋のまま埋めた場合も枯れたものはなかった。いずれの植え方も活着率が高く処理間で差はなかった。これは予想に反した結果であった。年別の平均樹高増加量(成長量)は、右図に示すようになった。3年後の樹高

は、① 65cm ⑤ 68cm ② 75cm ③ 77cm ④ 90cm だった。年別の増加量、また3年後の樹高についても、④根土をつけて袋を完全に取り去ったものが最も大きく、①袋のままが最も小さくなった。

この成長量に差がつくという結果をもとに、私たちは現場の担当者の理解を得て緑化を進めている。上からの通達の有無その内容に関わらず自らがよいと確信したことは実行するというのが中国のよくできる指導者像である。

(前中 久行)



植栽面積 6000ヘクタール 1900万本

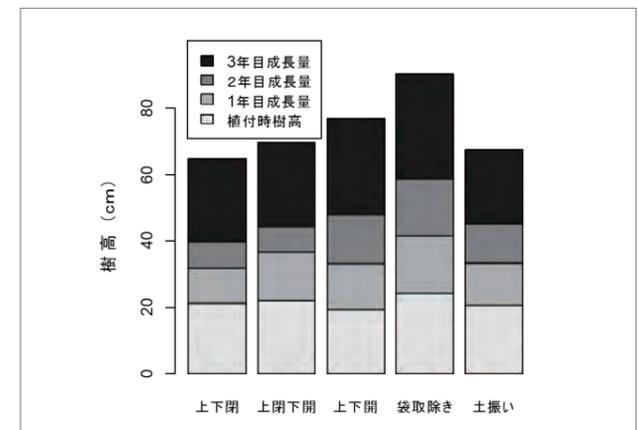


図 マツ苗のポリ袋の取り扱いと植付け後の樹高成長量の関係

史跡の活用と懸念

～活用に関する一現場担当者の雑感～

現在、観光立国は国の重要な政策であり、来訪外客数も2017年は速報値で2870万人(JNTO調査)となった。この流れを拡大し将来的には4000万人にすることが観光庁の目的である。

インバウンドを含めた観光振興は地域にとっても重要である。地域経済の衰退や人口減少等の懸案が重なる地域にとって、交流人口の拡大は地域の雇用を生み出し、結果、定住人口の確保が可能となる。

この時流に乗り、文化財保護法が来春大きく改正される予定である。これまでの保護主体から活用に軸足を置き替えるもので、史跡や歴史的建造物といった文化財を、地域活性化の主演として、観光化させることが今後より一層可能になる。

そのため、多くの地域は地域活性化の起爆剤として、地域内に確認される史跡について、調査と観光化を現在進めているところである。

このように、史跡を構成する遺構が「活用」の名のもとに急速に開発され、次々と観光の「目玉」化される現状について、現場担当者の立場から見て、三つの懸念を感じる。

一つ目の懸念は、発掘研究による十分な検証なく開発を急ぎ進めた結果、施設整備することで、遺構自体が破壊されてしまうという皮肉な結果になりはしないかというものである。

二つ目の懸念は、遺構の保護意識が強いあまり、一定以上の知識を持たない来園者には理解不能なレプリカオブジェが散在する、魅力の乏しい施設になりはしないかということ。

三つ目の懸念は、これらをうまく解決し、保存・活用を調和させた史跡の観光化に成功したとしても、オーバーユースや管理施設・管理計画の不備から、人的インパクトが増加し、結果として遺構の破壊につながらないかということである。



現物を展示しているが、劣化のため、覆われた遺構展示

一つ目の懸念の主因は、文化財に対する整備部局の意識の低さ、二つ目の主因は文化財部局の公開・活用に対する意識の低さ、三つ目の主因は屋外施設管理に対する双方の知識・経験の低さ、行政全体の文化財に対する投資意欲の低さにあると感じている。

史跡の整備は歴史好きな私にとって、個人的に大歓迎である。

実物の遺構は、過去の人々が歴史書の中ではなく、我々と同じ場所で生活し、次世代につながる営みを行っていたという強い実感を我々に与えてくれる。それゆえ、観光化された史跡は後世に至るまで、十分にその役割を果たしてほしいと強く感じる。

しかし、残念ながら、現在の流れは昨年12月の文化審議会答申での懸念にもあるように「価値を減じても活用」に近づきつつあるように見える。このような事態を防止するためにも、史跡の保存・活用にかかわる整備と文化財の現場担当者は、これまでの自分達の業務目的である観光利益、研究対象地の確保だけではなく、文化財を公開することで得られるトータルの公益化をお互いの専門分野からもっと歩み寄り考えるべきでないだろうか。

今後も文化財活用の流れは続くと思われる。そこにしかなく一度失うと復元不可能な史跡の価値を減じさせず、観光振興に結び付けていくためには、文化財の研究と保護だけでなく活用のスキルを持つ学芸員の確保、文化財に理解あり諸問題を克服できる技術を持つ整備技術



地域活性化も目的に、史跡整備が検討される
飛鳥宮跡・飛鳥宮跡苑池



史跡整備され、公園化された遺跡(唐古・鍵遺跡歴史公園)

者の確保、彼らが議論できるための組織など、体制が必要である。

また、発掘により確認された遺構はその用途が終了しているからこそ放棄・放置された、いわゆる「死んだ施設」が大半である。その場合、現在の私たちがその場所を利用する場合は、公園化など、思い切って用途を変更し日常的に活用できる「生きた施設」にすることも一案であり、その知恵を関係者全員で醸成していくことが必要だと考えている。

(奥田 篤)

◎ 浦崎真一氏「長岡安平」出版記念講演 “長崎の偉人 長岡安平翁の業績”

研修会は平成30年3月8日谷町センタービル1階会議室にて、会員を始め公園関係の公職、学界からも多くの出席があり、満席の中始まりました。

「長岡安平」・我々ランドスケープアーキテクトにとっても、ご存知の方は少ない。私も恥ずかしながら全く知らなくて、自分の不勉強を感じました。

会報に報告を書くように指示された事もあり事前に調べると、その経歴の中での活動や対応は、長岡自らが積極的に切り開いてきたというより、時代に求められ自分の出来ることを精一杯尽くされた誠実な人柄で、人間としての親しみが感じられました。

講演は浦崎真一氏が長崎偉人伝「長岡安平」を発売した記念講演であり、この本は浦崎氏が長岡安平の研究を自分のライフワークとして取り組んでいたところ、平成27年に浦崎氏

が翁の故郷である長崎県東彼杵町で没後90周年講演を行ったことキッカケに、研究成果をまとめ今回の発刊に至ったと語られています。

講演での話は、長岡の実績の紹介よりも“人となり”と“事に取り組む考え方”をメインに話題提供がなされました。そのため、長岡安平が幕末1842年(天保13年)に肥前大村藩彼杵の武士として生まれたが、武芸より文を好み自然を友として育ったという生い立ちの話から始まりました。長岡は明治維新の時に楠本正隆に同行し上京、1878年(明治11年)東京府に奉職“37歳の遅い公職デビュー”をしました。これが長岡安平の造園家として駆け出し始めであり、日本の公園づくりの始まりでもあったということでした。

その後、1896年(明治29年)秋田県千秋公園の設計をきっかけに1899年(明治32年)頃から日本各地から公園の設計依頼が

広がり、1902年(明治35年)60歳で退職。その後も囑託で多くの公園の設計、公園内の史跡保全、また緑地や作庭についても多くの実績を残されています。1925年(大正14年)84歳までの生涯、81歳には大仕事として花巻温泉(岩手県)の台遊園を設計をされています。

講演の最後の話題に、特に長岡の実績の特徴として、“地形や植物などの自然にこだわった公園づくり”と同時に“公園利用者の使い勝手重視”や“公園が有効に存続する経営思想”をもって携わった点を評価すべきと浦崎氏は強調しておられました。

これらは現在の公園に携わる我々にとっての基本課題でもあり、先人から受け継がれてきた公園思想とも言えると思われます。設計に際し一貫した思いと考えをもって、先ず現地をくまなく見て、図面を描き、施工のチェックをしながら作り上げていくという、“モノづくりの原則”の大切さを示したものとと言えます。近年、分業化が進み多くの問題が生じ、その対応策

として生まれた“デザインビルド方式”に通じるものかも知れません。

講演後、質疑応答が活発に行われました。その後、第2部として開かれた交流会でも意見交換が持ち越されて行われました。(中田 政廣)



講演会の様子